



# アーヴィング・ゴフマンの関与論：状況の社会学の展開に向けて（特集2 「状況の社会学」の展開可能性）

若狭，優

---

(Citation)

社会学雑誌, 41:149-160

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503775>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503775>



特集2 「状況の社会学」の展開可能性

# アーヴィング・ゴフマンの関与論

—— 状況の社会学の展開に向けて ——

若 狭 優  
日本大学文理学部助手

## 一 はじめに：状況とは何か

本稿の目的は、アーヴィング・ゴフマンが自らの社会学を展開するなかで、いかにして「状況」を探究の対象に据えたのかを「関与」の概念に注目して検討し、現代の社会学的研究として「状況の社会学」をどのように展開可能であるか考察することにある。

「状況の社会学 (sociology of situations)」(Rawls, 2003: 211) とは、米国の社会学者、アン・ロールズがアーヴィング・ゴフマンとハロルド・ガーフィンの社会学を総称して用いるものである。<sup>(1)</sup>ゴフマンとガーフィンは、その生涯を通じて、それぞれ独自の手法を用いて、様々な相互行為が展開される「状況」にアプローチしていったことは周知の事実であろう。とりわけ、ガーフィンの

のアプローチは「エスノメソドロジー」として、精緻な研究プログラムとなり、現代の社会学のなかで多様に展開されている (Vom Lehn, 2014: 110-114)。その一方、ゴフマンの研究手法については、記述スタイルや調査手法についての考察は成されてきたものの (内田、一九九五・渡辺、二〇一五)、状況の社会学におけるアプローチの一つとして確立しているとは言いがたい。

この問題点を克服し、状況の社会学のアプローチの一つとして、ゴフマンの社会学を打ち立てるといったことは、無論、本稿だけでは到底不可能である。そこで本稿では、ゴフマンがいかに「状況」を探究したのか、その一端を明らかにすることを通じて、その大きな目標に対して細やかに貢献することを試みる。

そもそも「状況」は、ゴフマンが唐突に探究の対象とし

て発見したわけではない。ゴフマンは状況を「そこに入った人が、すでにそこに存在している（あるいはその瞬間に生まれる）集まりの成員となる空間的環境の全体」<sup>(3)</sup>と定義しているが（Goffman, 1963a: 18＝一九八〇：二〇）、トマスの公理を見ても明らかのように、状況はゴフマン以前の社会学でも探究の対象となっていた。では、ゴフマンが見出した状況は、それまでの状況とはどのように異なるのか。このことを明らかにするために、本稿では、ゴフマンのシカゴ大学時代の師の一人であるエヴァレット・ヒューズの社会学における状況の捉え方と、彼の視点を比較し、その独自性について検討する。

その比較の際に注目するのが、「関与（involvement）」である。「場面にかかわりのある活動に何らかの認知的・感情的な没頭を維持し、心理生物学的資源を動員すること」（Goffman, 1963a: 36＝一九八〇：四〇）を指す「関与」は、ゴフマンが博士論文（Goffman, [1953] 2022）の頃から相互行為を考察するうえで重要な概念として取りあげ、その後、様々な著作で用いられている（Goffman, 1961a＝一九八五、1963a＝一九八〇、1967＝二〇〇二）。後期の著作では、関与というアイデアは「フレーム」（Goffman, [1974] 1986）や「参与枠組（participation framework）」（Goffman, 1981: 3）として発展していった。そこで本稿では、ゴフマンの社会学を通底する「関与」について検討することと、ゴフマン

が状況をいかに捉えていたのか、その一端を明らかにする。本稿は、以下の通りに論を展開する。まず、ヒューズの「職業の社会学」における「制度（institution）」と「キャリア（career）」という主要な概念がいかに用いられているのかを検討することを通じて、状況の捉え方を明らかにする。野田浩資によれば、ゴフマンは、一九四〇年代から五〇年代にかけて、ヒューズが学生たちと実施していた「職業」や「制度」に関するゼミに参加していた（野田、二〇二〇：一八三）。このことから、本稿では、ゴフマンが最も影響を受けたと推測できるヒューズの社会学として「職業の社会学」を取りあげている。そのうえで、ゴフマンの関与論を概観し、その独自性を考察する。最後に、ゴフマンの関与に関する議論がいかにして状況を捉えていたのかを検討する。

## 二 職業の社会学における状況

エヴァレット・チェリントン・ヒューズは、初期シカゴ学派の「人間生態学（human ecology）」を継承しながら、より具体的な状況を対象とした研究として展開している。その一つとして展開されたのが「職業の社会学」である。その成果は『人とその仕事（Men and Their Work）』（Hughes, [1958] 2016）にまとめられている。

野田によれば、ヒューズの「職業の社会学」の関心の出発点には、アメリカ社会を大衆社会として捉える認識があるという。大衆社会における職業の研究は、ヒューズにとって、現代のアメリカ社会論としての側面を持っていた(野田、二〇〇六:一〇一)。野田が指摘するように、ヒューズの「職業の社会学」は社会のある特定の領域を探究しようとする試みではなく、職業の研究を通じて、社会そのものを捉えようとする試みであるといえるだろう。ここで、職業は社会を垣間見るための覗き穴のようなものだったのだ。

ヒューズが「職業の社会学」を展開するなかで重要な概念として用いるのが「制度」と「キャリア」である。ヒューズは、社会のなかに既に存在するものと集合的な振る舞いが特定の方法で出会い、生じる秩序の現象のことを「制度」と定義している(Hughes, [1984] 2017: 6)。そのうえで、ヒューズは制度が、ある空間の特定の場所、それぞれ個別のものとなっていることに目を向けている(Hughes, [1984] 2017: 7)。状況という観点から言うならば、ヒューズは、様々な社会現象が状況のなかで生起するということを制度という概念で捉えようとしていたといえるだろう。

我々の日常生活は、こうした制度との出会いの連続である。この無数の出会いのなかで、個人は「キャリア」を形成していくことになる。「制度とは人々が続けている集合的な振る舞いや集合的行為形式に過ぎない。キャリア

の途上で、人間はこれらの形式のなかに自らの居場所を見出し、他の人々と関わりを持ちながら活動的な生活を送り、彼が生きねばならない人生の意味を解釈するのである」(Hughes, [1958] 2016: 38-9)。その過程のなかで生じる無数の「仕事のドラマ (work drama)」(Hughes, [1958] 2016: 28)を考察すること。これこそ、ヒューズの「職業の社会学」の主たる目的なのである。「人とその仕事」で取り扱われる「汚れ仕事 (dirty work)」(Hughes, [1958] 2016: 27)や「日常と緊急事態 (routine and emergency)」(Hughes, [1958] 2016: 30)、「仕事での間違い (Mistake at Work)」(Hughes, [1958] 2016: 59-67)といったトピックは、その代表的なものである。

ヒューズの「職業の社会学」は、個別具体的な「状況」のなかで生じる社会現象としての「制度」と、それに直面する個人の「キャリア」に注目し、そこで何をしているのかを考察するものである。ヒューズは言う。「我々の目的は個人的かつ社会的な仕事のドラマにより深く入り込み、自身や他者にとって仕事を耐えられるもの、あるいは輝かしいものにする社会的・社会心理学的な取り決めや工夫を理解することである」と(Hughes, [1958] 2016: 27)。このような社会学において、「集まりの空間的環境」としての状況は、個人が制度と出会い、キャリアが形成される地点として位置づけられていると考えられる。そして、この地

点で巻き起こることそのものが「社会」なのである。皆川満寿美が指摘するように、ヒューズにとって「社会」とは「相剋的な内的過程」と、『いま』と『ここ』という具体的な時間と空間を備えた、具体的な『身体』のもち主として莫大な数で地球上に分布している、われわれ『行為者』によるシークエンシャルな行為のとりかわし・よりあわせの全体であり、その行為が、『出来事として実際に起きること』なのである」（皆川、一九八九・七三）。

状況のなかで生起することそれ自体が「社会」であるというヒューズの視座は、ゴフマンが自らの社会学に明確に取り込んだ点であろう。ヒューズはそこから個別具体的な状況のなかで巻き起こる様々な職業の相互作用をドラマとして考察していった。そうした研究は「社会が実際多元的な世界の交錯であることをわれわれに教えてくれる」（皆川、一九八九・七六）。ヒューズは、状況を一つの地点として、社会を多元的な世界の交錯として捉えた。その一方で、ゴフマンは、相互行為の参与者がそれぞれ異なる「状況の定義」（Goffman, 1959=二〇二二：一八）を持っているという前提はヒューズと共有するものの、それにもかかわらず、状況のなかで多様な人々が一つの秩序を作りあげるといふ点に着目して、いかにしてその秩序が達成されているのかという方向に研究の方針を切り替えている。その転轍の際に重要となるのが、関与である。

### 三 関与と状況

ゴフマンはいかにして関与を設定したのか。関与は単に、参与者が眼前の活動に関わりを持つっていると呈示することを指すためのものではない。関与には、議論の前提として、いくつかの要素が含まれている。

まず、ゴフマンにとって、関与とは道徳的な義務である。人々が日常生活を生きるなかで、眼前で繰り広げられる様々な活動に関わりを持つことは自由に選り取れるものではなく、「しなければならぬ」ものののだ。ゴフマンはこれを「関与義務 (involvement obligations)」(Goffman, 1967=二〇〇二：一一六・九)と云う。

なぜ、関与は義務となるのか。それは、端的に言えば、関与は自己の神聖性と密接に関わりを持つているからである。ゴフマンはデュルケムの人格崇拜論を発展させ、近代社会において神々の代わりに人々自身が敬われるべき対象となっていることを指摘している (Goffman, 1967=二〇〇二)。あらゆる相互行為場面において、参与者は他者を敬わなければならないし、自らは敬われるものとして扱われると期待することができる。<sup>(7)</sup>近代社会における人格崇拜論は相互行為場面にそのような前提を付与する。

この前提があることで、関与は義務となる。なぜなら、相互行為場面で適切な関与を示さなければ、その場面に関

わるあらゆる人たちの神聖性をないがしろにするものとなるからだ。例えば、会社の同僚に朝の挨拶として話しかけられたにも関わらず、その挨拶を無視し、関与を示さないとする。そうすると、その同僚は「話しかけると、それに応じた適切な返答が得られる」という社会を生きる人間であるならば、当たり前のものとして持つて良いはずの道徳的な期待をないがしろにされたことになる。少々大げさに言えば、この瞬間、同僚は「人間」として扱われなかったのである。相互行為の参与者が人間である以上、まず、その人を「人間」として取り扱わなければ、何も始まらない。だからこそ、関与は「行為の組織化における基礎的な道徳的制約 (a primary moral constraint on the organization of action)」(Rawls, 1987: 139) の一つとして捉えることが可能なのである。

日常的な場面のなかで参与者がそれぞれの相互行為に適切に関与することが「義務」として設定されているのであれば、参与者は眼前の相互行為にどのように関与すればいいのかという課題に直面することになる。例えば、入学式や結婚式といった式典では、登壇して祝辞を述べる校長先生や乾杯の音頭を取る会社の上司の発話に耳を傾けているということを随時示す必要がある。発話者に首や体を向け、時折頷き、会話の流れにに応じて笑ったり、泣いたりして感情を表出することもある。こうした表現を通じて、自らが

式典に関与していることを示し続けなければならない。その一方で、工場の流れ作業の最中に交わされる同僚との細やかな雑談には、そのような関与の仕方は不適切である。そういった雑談は、相手に目を向けることもなく、作業の手を休めることもなく、生返事を繰り返すぐらいがちょうどよい。

参与者は、日々の出会いのなかで、この課題に終始取り組み続けなければならない。これは「関与配分 (allocation of involvement)」(Goffman, 1963a=一九八〇: 四八) に関する課題である。この課題を達成するうえで、重要な条件となるのが、状況の物理的側面である。対面的相互行為は、参与者同士が物理的に共在することで生じる。共在によって身体が近接するということは、それだけでその空間のなかで行われる活動への関与を示すことになる。身体は「表出的メッセージ」(Goffman, 1963a=一九八〇: 一五) を伝達するものであり、物理的に共在する人々がその人の身体を知覚するだけで、何らかのメッセージを受け取ることになる。だからこそ、適切な距離で身体を近接させることは、それだけで関与を示すことにつながるのである。先述した式典を考えてみても、式典が繰り広げられる会場に入室しなければ、その活動への参加を示すことはできない。また、友人同士の細やかな雑談であつても、同じテーブルを囲む程度には近接する必要があるだろう。

空間的な身体の近接は、関与を示す表現の手法として有益である一方、我々の日常生活においては、空間的な制約に伴って仕方なく身体的に近接せざるを得ない事態がある。エレベーターの中や満員電車はその最たる例である。このような事態では、空間的な制約が関与義務から生じる課題の達成において一つの条件として機能している。空間的な制約は参与者に、たまたま居合わせただけの、関与をほとんど示す必要がない他者に対して、場面にはふさわしくない関与を示すことを強要している。しかも、身体はただそこに在るだけで、参与者の思惑とは無関係に表出的メッセージをばらまいてしまう。そのため、参与者は課題を解決するうえで、この条件がもたらす事態にも対処しなければならぬ。「市民的無関心 (civil inattention)」(Goffman, 1963a: 83 = 一九八〇: 九二) や「関与シールド (involvement shields)」(Goffman, 1963a = 一九八〇: 四二) は、その対処法の一部といえる。

市民的無関心は、空間的な制約による身体の近接から生じる意図せぬ関与の表現に対して、自らはその活動に関与していないことを示す実践である。視界に入ってくる他者への視線を意図的に外したり、近くにいる人の会話に対して聞こえていないふりをしたりするといった取り組みは「居合わせた人々を、その他の社会的特徴の観点からではなく、単なる集まりにおける参与者としてとらえる対人法」

(Goffman, 1963a: 86 = 一九八〇: 九六) であり、これによって、人々は意図せぬ関与に対処しているのである。また、「知覚をさえざる遮蔽物」(Goffman, 1963a = 一九八〇: 四二) である関与シールドを用いれば、たとえ共在していたとしても、自らの身体の一部を隠すことで、関与の呈示を強制的に遮断することができる。

我々は身体を持ち、対面的な状況のなかで日常生活を営む以上、こうした条件に対処しながら、適切に関与を示し続ける。こうした関与を示し続けることで、参与者は単に同一の空間のなかに居合わせた人々、すなわち「集まり (gathering)」(Goffman, 1963a = 一九八〇: 二〇) を「単なる集合から小さな社会、あるいは小さな集団、社会組織の小さな保管場所へと変化」させることができる (Goffman, 1963a: 243 = 一九八〇: 二六)。いくら式典を開催するといっても、参加者を特定の空間に集めるだけでは、それは式典にはなり得ない。そこにいるのは、式典の参加者ではなく、ただの「集まり」に過ぎない。しかしながら、集まった人々がここで繰り広げられる活動が式典であると自覚し、適切な関与を示すことで、はじめてその活動は式典となり、単なる人々の「集まり」は式典の参加者という集団に変化するのである。

日常生活におけるあらゆる活動が社会的に有意味になるのは、こうした関与の達成によるものである。この点で、

ゴフマンは、ヒューズの「社会」の捉え方を踏まえたうえで、それとは異なる方向に状況の研究を進展させたと評価することができよう。個別具体的な時空間に存在する状況のなかで巻き起こること全てが「社会」なのであるというヒューズの主張に対して、ゴフマンは関与という概念を用いて、その状況がいかにして「社会」で在り続けているのかを理論的に深めていった。状況が「社会」であるのは、あくまで関与によってであり、それがいかにして成り立っているのかこそ、ゴフマンの「状況の社会学」における主たる関心なのである。

#### 四 おわりに…社会なき地平としての状況

ここまで、ゴフマンの「関与」について、ヒューズの職業の社会学における状況の捉え方との比較を通じて、その展開を見てきた。ゴフマンは、ヒューズの視角を継承しつつ、そこから方向転換をすることで、自らの「状況の社会学」を構想していったといえる。最後に、ゴフマンにとって、結局「状況」、そして「状況の社会学」とは何だったのかについて見ておくことにしよう。

そのことを考えるには、そもそもゴフマンはどのような目的を持って「状況の社会学」を構想したのかを見ておく必要がある。その際に重要となる要素の一つと考えられる

のが、当時の精神医学<sup>(8)</sup>である。ゴフマンは、関与について体系的に論じている『公共空間における振る舞い』において、精神医学について批判的な見解を述べている。彼は、精神科医による「徴候的・被徴候的という不適切な行為の区別は、われわれの社会に深く根づいた思考の様式であり、あらゆる不適切な行動を適合度や妥当性に構うことなく、この二種類に分類してしまう」(Goffman, 1963a: 232) 一九八〇・二四九)とし、そういった見方を「精神医学の素人的アプローチ (lay-psychiatric approach)」(Goffman, 1963a: 一九八〇・二五四)と呼んでいる。

ゴフマンの社会学には少なからず、こうした当時の社会科学や精神医学、言語学の視座への批判として展開されてきた部分があるといえる。例えば『戦略的相互行為』(Goffman, [1969] 1970) は当時のゲーム理論の行為の捉え方を批判している箇所がある<sup>(9)</sup> (Jaworski, 2023)、後年の『トークの形式』(Goffman, 1981) では、言語学や会話分析に対する批判として読める箇所がある。現代の社会学者がゴフマンの「状況の社会学」から何かを学ぼうとするのであれば、この社会へのまなざしに対する厳しい批判的精神に注目しなければならないだろう。

ゴフマンが関与という概念を用いて批判したのは、先述したように、当時の精神医学が無自覚に持ち込んでしまっていた「社会に根深く植えつけられた思考様式」である。

社会を生きる人々は、眼前で繰り広げられる行為を適切なものであるか、不適切なものであるかを当たり前のように区別することができる。しかしながら、それは我々の社会に植えつけられたものであり、科学的な知見に基づいた区別ではない。当時の精神医学は、その区別を所与のものとして採用し、行為の分類に用いている。だからこそ、ゴフマンはそれを「素人的」と揶揄するのである。

社会を科学的により適切に、より正確に考察しようとするのであれば、この思考様式を手放す必要がある。その視座こそ、ゴフマンが構想した「状況の社会学」といえるだろう。ゴフマンによる定義を見ても明らかのように、状況とは単なる「集まりの空間的環境の全体」に過ぎない。状況とは、ただそこに人がいて、様々な事物があるだけの物理的空間を指す言葉である。そこに社会は存在していない。そこに社会が生まれるのは、そこに居る人々の「関与」によってである。人々は道徳的な制約と、当該の空間がもたらす様々な物理的な変数に影響を受けながら、相互行為に関与する。これによって、単なる人々の「集まり」は「集団」となり、「組織」となる。そこでの発話は「授業」の一部となり、「商談」の一部となる。そして、はじめて「社会」は生まれるのである。

ゴフマンは関与という概念を用いて、状況という分析の単位に辿り着いた。それは、社会という思考様式がアプリー

オリなものとして設定されていない、社会なき地平とでもいべきものである。そこにあるのは、人とモノだけである。社会を生きる人々は、相互行為を通じて、そこに社会を作り出す。その過程こそ、「状況の社会学」の探究の対象なのである。これは、ゴフマンが「状況」の研究においてヒューズの視角を引き継ぎながら、さらに発展させた点として評価することができるだろう。ゴフマンが言うように、状況は「社会的組織の他の基礎的な形式に匹敵するくらい、それ自体としての分析を必要とするし、それに値するもの」なのである (Goffman, 1964 = 二〇三・二八八)。

日常を生きる人々は、条件の異なる様々な「状況」のなかで、例えば「家族」という集団を達成したり、あるいは「授業」という活動を達成したりする。それはいかに行われているのか。その達成は、ときに参加者が何も意識することなく、軽やかに達成されることもあれば、居心地の悪さを感じながら、いろいろなところに気を使つてなんとか達成されることもある。そうした「関与」の様々な在り方の差異を記述することから考察を出発させることが、「状況の社会学」の方針の一つといえる。

ゴフマンのこうした「状況」の捉え方と、そこから展開される「状況の社会学」は、ガーフィンケルのエスノメソドロジー<sup>②</sup>における基本的な方針と大きく重なる。それゆえに、ロールズがしたように、二人を同時代に同じ方針を掲

げた社会学を展開した研究者として評価することはできない。「状況の社会学」を今後さらに展開するためには、ゴフマンがどのような構想を持っていたのかを注意深く検討していく必要があるだろう。ゴフマンの「状況の社会学」はいかにして可能か。それが現代で「状況の社会学」を始めようとする我々に与えられた課題だといえる。

## 註

- (1) ロールズは、後にゴフマンとガーフィンケルのほかに、ハーヴェイ・サックスとタルコット・パーソンズを加えて、彼らが「代替的な相互行為の社会学 (alternate interactional sociology)」を打ち立てようとしていたと指摘している (Rawls, 2022)。また「状況の社会学」という言葉は、ゴフマン自身も自らの著作の中で、*sociology of situation* という表記で用いている (Goffman, 1963a=一九八〇:二五四)。
  - (2) 本稿では、ゴフマンの著作から引用を行う際は、邦訳から引用している。しかしながら、著者の判断で、適宜、原文から訳し直して引用している場合もある。その場合は、邦訳のページ数と併せて、原文のページ数も記載している。
  - (3) ゴフマンのシカゴ大学時代におけるもう一人の師は、ロイド・ウォーナーである。ウォーナーとの関係性については、グレゴリー・スミス (Smith, 2022) を参照。
  - (4) 現在では、関与で示されたゴフマンの着想は、会話分析や相互行為分析のなかに巧みに取り込まれて展開されている。西阪仰
- の「参与フレイム」に関する議論はその好例といえる (西阪、一九九二:二〇八)。
  - (5) ゴフマンは生前のインタビュ어의なかで、度々ヒューズに言及し、自身がヒューズの影響下にあると述べている (Wink, 1988=一九九九: Verhoeven, 1993)。ゴフマンとヒューズの関係性については、ジャウォルスキ (Jaworski, 2000)、ヴィエンヌ (Viennet, 2010) を参照。
  - (6) 野田によれば、「人とその仕事」には「一九二〇年代から一九五〇年代の論文がまとめられているが、職業研究の論文は、一九五〇年代から一九五五年頃を中心としている」という (野田二〇二〇:一八三)。
  - (7) ゴフマンはこれらを「自尊心 (self-respect)」(Goffman 1967=2002: 9)「思いやり (considerateness)」(Goffman, 1967=二〇〇二: 一〇・一)という。
  - (8) デイミトリ・シャリンによれば、ゴフマンが精神医学に対して批判的な姿勢を取るようになったのは、精神疾患を抱えた妻の影響によるところが大きいという (Shalin, 2013)。ゴフマンが精神病院や精神疾患を抱えた患者を考察した著作としては、『アサイラム』(Goffman, 1961b=一九八四)と論文「場所の狂気 (The Insanity of Place)」(Goffman, 1969) がある。
  - (9) ロールズが「状況の社会学」の主要な論者として取り上げるガーフィンケルや、ゴフマンとガーフィンケルの近くに居ながら社会学を展開したサックスが、ゴフマンが社会科学や精神医学、言語学に対して行ったように、従来の社会学の「社会」の捉え方を批判しているというのは (Garfinkel, [2006] 2016; Sacks 1963=二〇一三)、偶然ではないだろう。ゴフマンとガーフィ

ンケルは、ある時期は非常に密接に交流し、後に『ステイグマの社会学』(Goffman, 1963b)「一九七〇」(二〇〇一)と『エスノメソドロジー研究』(Garfinkel, [1967] 1984)の一章として刊行される内容を、共著として出版する話まで持ちあがっていた(Rawls, 2023)。また、サックスは一時期、ゴフマンを指導教員としており、自身の講義では、ゴフマンの『日常生活における自己呈示』の重要性を説いていた(Sacks, 1992: 619; Hoey & Rawls, 2022)。こうした交友関係を踏まえると、彼らが当時のアメリカ社会学ならびにその他の学問領域に対して、何らかの問題意識を共有していたと考えることもできるだろう。

## 文献

- Garfinkel, Harold, [1967] 1984, *Studies in Ethnomethodology*, Cambridge: Polity Press.
- , [2006] 2016, *Seeing Sociologically: The Routine Grounds of Social Action*, Abingdon: Routledge.
- Goffman, Erving, [1953] 2022, *Communication Conduct in an Island Community*, Bethlehem: Mediadstudies Press.
- , 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday. (= 二〇一三) 中河伸俊・小島奈名子訳『日常生活における自己呈示』筑摩書房。
- , 1961a, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, Indianapolis: Bobbs-Merrill. (= 一九八五) 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い——相互行為の社会学』誠信書房。
- , 1961b, *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental*

*Patients and Other Inmates*, New York: Anchor Books. (= 一九八四) 石黒毅訳『アサイラム——施設被収容者の日常生活』誠信書房。

——, 1963a, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, Glencoe: Free Press. (= 一九八〇) 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房。

——, 1963b, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall. (= 「一九七〇」二〇〇一) 石黒毅訳『ステイグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ——せりか書房。』

——, 1964, “The Neglected Situation,” *American Anthropologist*, 66(6): 133-6. (= 二〇一三) 芦川晋訳『状況が見落とされてきた』山崎敬一・浜日出夫・小宮友根・田中博子・川島理恵・池田佳子・山崎晶子・池谷のぞみ編『エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック』新曜社(二八三—二九一)。

——, 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour*, New York: Doubleday. (= 二〇〇一) 浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為(〈新訳版〉——対面行動の社会学』法政大学出版局。)

——, 1969, “The Insanity of Place,” *Psychiatry*, 32(4), 357-88.

——, [1969] 1970, *Strategic Interaction*, Oxford: Blackwell.

——, [1974] 1986, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Boston: Northeastern University Press.

——, 1981, *Forms of Talk*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Hoey, Elliott & Anne Warfield Rawls, 2022, “Harvey Sacks (1935-1975),”

- Karl Lenz & Robert Hertz eds., *Goffman Handbuch: Leben-Werk-Wirkung*, Berlin: J.B. Metzler, 371-8.
- Hughes, Everett Cherrington, [1958] 2016, *Men and Their Work*, New Orleans: Quid Pro Books.
- \_\_\_\_\_, [1984]2017, *The Sociological Eye: Selected Papers*, Abingdon: Routledge.
- Jaworski, Gary D., 2000, "Erving Goffman: The Reluctant Apprentice," *Symbolic Interaction*, 23(3): 299-308.
- \_\_\_\_\_, 2023, *Erving Goffman and Cold War*, Lanham: Lexington Books.
- 皆川満寿美, 一九八九, 「社会過程の社会学——ヒューズ」片桐雅隆編『意味と日常世界——シンボリック・インタラクショニズムの社会学』世界思想社, 五七—八四。
- 西阪仰, 一九九二, 「参与フレイムの身体的組織化」『社会学評論』四三(一): 五八—七三。
- \_\_\_\_\_, 二〇〇八, 「分散する身体——エスノメソドロジーの相互行為分析の展開」勁草書房。
- 野田浩資, 二〇〇六, 「ヒューズ専門職論の成立——Men and Their Work (1958)の再検討」中野正大編『現代社会におけるシカゴ学派の応用可能性』(科研費報告書), 九九—一〇六。
- \_\_\_\_\_, 二〇二〇, 「ヒューズからゴフマンへの継承と展開——シカゴ学派と相互作用論の再評価をめぐって(二)」『京都府立大学学術報告(公共政策)』一一: 一七—八五。
- Rawls, Anne Warfield, 1987, "The Interaction Order Sui Generis: Goffman's Contribution to Social Theory," *Sociological Theory*, 5(2): 136-49.
- \_\_\_\_\_, 2003, "Orders of Interaction and Intelligibility: Intersections between Goffman and Garfinkel by Way of Durkheim," A. Javier Trevino ed., *Goffman's Legacy*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 216-53.
- \_\_\_\_\_, 2022, "Situating Goffman's «Interaction Orders» in Durkheim's Social Fact Lineage: Grounding an Alternate Sociology of Modernity in Heightened Awareness of Interaction," *Enografica e ricerca qualitativa*, 2022(1): 27-62.
- \_\_\_\_\_, 2023, "The Goffman-Garfinkel Correspondence: Planning «On Passing»,» *Enografica e ricerca qualitativa*, 2023(1): 175-218.
- Sacks, Harvey, 1963, "Sociological Description," *Berkeley Journal of Sociology*, 8: 1-16. (＝二〇一三「南保輔・海老田大五朗訳「社会学的記述」『コミュニケーション紀要』二四: 七七—九二)。
- \_\_\_\_\_, 1992, *Lecture on Conversation vol.1*, Oxford: Blackwell.
- Shalin, Dmitri N., 2013, "Goffman on Mental Illness: Asylums and "The Insanity of Place" Revisited," *Symbolic Interaction*, 37(1): 122-44.
- Smith, Gregory W.H., 2022, "W. Lloyd Warner (1898-1970)," Karl Lenz & Robert Hertz eds., *Goffman Handbuch: Leben-Werk-Wirkung*, Berlin: J.B. Metzler, 123-9.
- 内田健, 一九九五, 「「コミュニケーション」とは何か——E.ゴフマンの著述スタイルをめぐって」『早稲田大学人間科学研究』八(一): 一五—三五。
- Verhoeven, Jef C., 1993, "An Interview with Erving Goffman, 1980," *Research on Language and Social Interaction*, 26(3): 317-48.
- Vieme, Philippe, 2010, "The Enigma of the Total Institution: Rethinking the Hughes-Goffman Intellectual Relationship," *Sociologica*, 2, 1-30.
- Vom Lehn, Dirk, 2014, *Harold Garfinkel: The Creation and Development of Ethnomethodology*, London: Routledge. (＝二〇一四「荒野侑甫・秋

谷直矩・河村裕樹・松永伸太朗訳『ハロルド・ガーフィンケル——エスノメソドロジーの誕生と社会学のあゆみ』新曜社。）

渡辺克典、二〇一五、「ゴフマネスク・エスノグラフィー」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン——やりとりの秩序の社会学』新曜社、二六―四五。

Winkin, Yves, 1988, “Erving Goffman: Portrait du sociologue en jeune homme,” Yves Winkin ed., *Les Moments et Leurs Hommes*, Paris: Seuil, 11-92. (＝一九九九、石黒毅訳『アーヴィン・ゴフマン』せりか書房。)

## 付記

本稿はJSPS科研費 JP23K12618, JP24K05257 の助成を受けた研究成果の一部である。